

国語科における中高接続を円滑にする授業研究

－より豊かな学びを目指す高校国語教育の在り方－

M11EP002

遠藤 祐也

1. はじめに

前年度、国語科における中高接続上の課題について研究を行うことにしたが、この分野に関する先行研究はほとんどないのが現状であった。そこで内閣府発表の「高等学校中途退学者の意識に関する調査」(2011)を参考に、高校での学習における問題が生徒のつまずきの主たる要因の1つになっているのではないかという仮説のもと、高校1年生を対象とした高校生活や英数国の学習に関わる調査を実施して、高校入学間もない生徒が、日ごろの学校生活や学習をどのようにとらえているのか把握することとした。その主な分析結果が以下の3点である。

【高校生活・基礎科目実態意識調査 より】

- ①入学間もない高校1年生の多くは高校での学習に不安を感じている
- ②国語と英語・数学を比較すると、国語の学習方法や学ぶ意味がわからない生徒が多い
- ③国語の教科内容では現代文・古典の読解分野に苦手意識を持つ生徒が多い

調査で得られたこれらの視点をもって高校、中学校での実習において授業観察・授業実践を行い、中学校から高校にかけて生徒が感じるつまずきや戸惑いは何に由来するのかということ考察し、高校導入期の学習指導において注意を要する観点を得ようと試みた。

その結果、以下の3観点を得た。

- 1) 前述の実態調査における①の不安は中学校から高校での授業の方法・進度・内容の変化に由来している。(具体的には、中学校の生徒主導型・1時間に半面から1枚の板書・ていねいな脚注や現代語訳が豊富な教

科書を用いた授業から、高校の教師主導型・何度も書き換えられる板書・シンプルなつくりの教科書を用いた授業への変化は生徒にとって大きなギャップとなっている)

2) 中学においても学習の方法や学ぶ意味について触れられることはほとんどない。

3) 中学の古典学習において、学習の意味づけを明確にし、教師が前提知を教えたうえで生徒相互の学びあいを促す授業を実践することで、深い教材理解が達成された。

(以上の3点より、高校で学習内容が高度になればなるほど学習の方法や学ぶ意味の習得の必要性が顕在化することになる)

これらを踏まえ、本年度は高校1年生を対象に中高の接続を円滑にしてギャップを緩和し、学習するうえでの不安を軽減する授業づくりについて研究することとした。

2. 研究の目的

- 1) 昨年度の研究をもとに、生徒が抱える不安(苦手意識・つまずき)の要因を再確認する。
- 2) 中高の接続を円滑にするという観点から、特に**夏休み前までの期間**に集中して講じられる具体的な手立ての可能性を探る。
- 3) 学習の方法や学ぶ意味を教えることで、知識だけではなく、国語に対する興味や関心を喚起し、自分自身を通して教材を読解し、クリティカルにとらえることができる広い知見や思考力を持たせる指導を行う。(傍線部を副題の「豊かな学び」と定義)

3. 研究の内容・方法

本年度は所属校に戻り、高校1年生の「国

語総合（現代文・古典）」の授業を担当した。

前年度の学習実態調査および、実習で得た観点を踏まえ、研究の目的を達成させるための教授上の要点として特に以下の4点を意識した授業実践を心がけた。

- A. 中学校の既習事項とのつながりを教示
- B. 教材のねらいを教示（何を学ぶのか）
- C. 学習の方法を教示（どう学ぶのか）
- D. 学習の意味を教示（なぜ学ぶのか）

上記については明確な正解がなく、とても1回の授業で語りつくすことはできないもので、最終的には生徒自身が見出していくべきものでもある。しかし、「私が指導してきた生徒を見ても、学力にかかわらず、どのように学習すればよいのかは案外わかっていない」（市川，2011）のが現実である。生徒へ上記のような具体的な投げかけをしていくことが、円滑な中高接続に重要であり、まずは教えられた学習に関する知識や方法を生徒が取り入れ、高校の学習に慣れてきたうえで、与えられた情報を取捨選択したり、アレンジを加えたりして、最終的に生徒自身の学習観として形成していけばよいと考えた。

そして前述のA～Dを実現するための具体的な手段として、生徒に教示するうえでの工夫を以下のように試みた。

- 教科オリエンテーションの工夫
- 教材プリントの工夫
- 授業の工夫

以降、各取り組みについてまとめていきたい。

4. 教科オリエンテーションの工夫

（1）実施対象・形態・時期・目的

実施対象：県立A高校1学年283名

実施時期：平成24年4月

目的：学習上の注意事項を確認させ、高校での学習への馴致を図る

（2）内容

例年行われている副教材の配布、週課題提出・小テスト実施スケジュールの確認、シラ

バス配布、予習の方法についての確認（主にノートの作成方法）に加えて、「国語アンケート」「オリエンテーションミニテスト」を試行した。

（3）国語アンケートの実施

①ねらい

- ・説明を受ける前の生徒それぞれが持つ、国語（現代文・古典）および国語学習に関する認識を収集（接続上の問題点の把握）
- ・生徒に自分自身が持つ国語および国語学習の意識やイメージを書かせることで自分の学習観を具体的に認識させる

②アンケート項目（自由記述方式・一部抜粋）

- i. 中学校の国語の授業の取り組み状況はどうだったか？
- ii. 「現代文」を学ぶ意味・意義は何か？
- iii. 「古典」を学ぶ意味・意義は何か？
- iv. 高校の授業での不安や心配は何か？

③アンケート結果（一部抜粋）

iの中学校時の国語の授業の取り組み状況について、「例を挙げて先生がわかりやすく説明し、積極的に取り組んでいた」「発言する機会が多く作られていた」という回答の一方で、「家庭学習は試験前以外ほとんどしなかった」「予習復習はあまりしなかった。授業を聞いていればどうにかなるので、テスト前はノートを見直すくらいしかなかった」といった回答もあった。学習習慣が身につけていることが伺える記述はほとんど見られなかった。

ii・iiiの現代文や古典を学ぶ意味や意義に関する回答としては、「読解力や知識を身につけて日常生活に生かせるようにするため」「古語を知り、古典を読む楽しさを知ること」と前向きに意味を捉えている生徒もいたが、多くは「わからない」という回答であった。特に古典においてその傾向が高く、前年度の学習実態調査と同じ状況であった。

ivの不安なこと・心配なことに関する回答として「文章を書くのが苦手なので、自分で文章を考える授業が不安」「どのくらい難しい

のか、進度がどのくらい速いのか不安」などの回答が寄せられた。また、「古典の授業についていけるかが不安」といった、古典分野に対する不安がわかる回答が多くあった。

(4) オリエンテーションミニテストの実施

①ねらい

- ・体験を通して教師が説明する国語に対する前提知識（どのような知識が問われるのか・どのような勉強をしていけばよいのか）について説得力を持って具体的に理解させる
- ・具体的な失敗経験をさせることで日常の国語学習について自ら修正する力を養わせる

②テストの内容・出題の意図

1). 漢字の書き取り・読み取り

春休みの課題教材から出題した。「漢字の読みをカタカナで記せ」と指示することで、設問を読み、問われていることを把握することが国語学習の大前提であること、また、春休みの課題として出題していた漢字は、課題教材でも誤っていた可能性が高いはずであり、できなかつたところを次にできるようにするには、不出来の箇所を把握し、その部分の集中学習が必要であるということに気づかせることを意図して出題した。

2). 歴史的仮名遣いの五十音表の書き取り

「漢字」の出題同様、春休みの課題教材から出題した。意図については1)と同様である。

3). 論証文に関する問い

野矢茂樹『論理トレーニング 101 題』から、問題として「月曜日が祝日ならば、翌日の火曜日が休館になる。」という文を引用し、この文の逆・裏・対偶となる文を用意し、問題文と同じ意味になる文はどれかを考えさせた。

現代文の論理構造（演繹的推論）の理解の仕方と他教科（数学「命題と論証」の単元）への敷衍を認識させることを意図した。

4). 学校紹介のキャッチコピーに関する質問

高校のキャッチコピーとしてふさわしいものを選ばせる出題をした。七五調のリズムで韻文的なA案「甲府東で夢かなう」と散文的

なB案「甲府東高校で夢をかなえられる」を提示して、A案の音調の良さを感じさせ、それが和歌の文字数に由来すると示すことで古典への興味を持たせることを意図した。

5). 客観解答方式による読解問題

問題文を読み、本文の内容に合っているものをすべて選ばせる問題を出題した。問題文そのものはいわゆる「浦島太郎」であり、ごく平易な文章であるが、設問の選択肢を本文と照らし合わせてよく吟味しないと正解にはたどりつけない。「読書≠読解」ということに気づかせることを意図した。

③観察による生徒の反応

1). 漢字の書き取り・読み取り

答え合わせの前に、「隣の人の文字の種類を見てごらん」と促したところ、多くの生徒からどよめきがあがった。ほとんどの生徒がカタカナで記せという指示に従うことができていなかった。

また、「間違えた所は、春休みの課題でも書けなかったはずだ」と話したところ、多くの生徒が頷いたり、苦笑いをしたりしていた。

2). 歴史的仮名遣いの五十音表の書き取り

採点をしてみると漢字分野と同様の反応が見られた。漢字だけでなく、歴史的仮名遣いでも一度間違えたところは次も間違える可能性が高いということが確認できたようだ。

3). 論証文に関する問い

問題そのものはかなり難しかったようで、正解者は少なく、確かな根拠をもって正解を選べた生徒はほとんどいなかった。しかし、「山梨県民であるならば、日本国民である」という例文に置き換えて考えさせたところ、全員が理解できていた。同じ論理構造をもつ卑近な例を自ら援用することで書かれ方がわかって内容の理解につながるため、学習方法上有効であると認識できたようだ。

また、数学への敷衍について、実際に「数学I」の教科書を開いて、自分の目で確認さ

せることで、科目横断的な視点の重要性にも気づくことができたようだ。

4). 学校紹介のキャッチコピーに関する質問

出題者の見込みではほとんどの生徒が韻文的なA案を選ぶのではないかと思っていたが、実際はA案:B案が「6:4」程度であった。A案を選んだ生徒の理由は出題者の意図したような「リズムが整っているから」「端的で頭に入ってきやすいから」といったものが多く見られたが、B案を選んだ生徒は『高校』が入っているから」「ていねいな言い方だから」というようなものが散見され、「キャッチコピー」という用語の理解が十分でなかったようだ。今後類似の出題をするにしても、出題の仕方を再考する必要がある。

5). 客観解答方式による読解問題

〈完全解答〉ということもあり、正解者はひとりもいなかった。特に選択肢スの「太郎は龍宮城で美しい乙姫からおいしい酒やごちそうを振る舞われ、夢のような日々を過ごした」を正答とした生徒が多くいたが、本文には「乙姫」の容姿に関する言及は一切ない。無意識のうちに自身の内なる「浦島太郎」と課題文を混同させているところに文を正しく読むことの困難性と重要性があるという説明をしたところ、多くの生徒たちが頷いていた。少なくとも「読みやすい文だから解きやすいことにはならない」、つまり「読書≠読解」ということに気づかせることはできたのではないかと考える。

④効果の検証と考察

今回のオリエンテーションを生徒はどのように受け止めたのかということを確認するため、アンケート調査を実施した。

調査日：平成24年4月12日（オリエンテーション翌日）

調査対象：県立A高校 1年X組 40名

調査方法：無記名による質問紙法

質問1. 国語オリエンテーションでどのよう

なことが伝わったか？

テストとして自分が「アロスミス」、問題文をよく読んでいないことが分かった。
漢字は一度直しただけでは覚えていないことも教えてもらい、
高校での漢字や単語の勉強の仕方が学べた!

図1：質問1の生徒記述

他にも「わからないところは何回もやる!」「よく文章を読む。」「他の教科ともつながっている」など、ミニテストに関わって学習方法や学ぶ意義にふれた記述があった。生徒にとっても印象が深く、結果としてこちらのねらいの多くが伝わったと感じている。

質問2. これまでの国語観（国語に対する意識・見方）に変化はあったか？

・「変化があった」「少し変化があった」と回答した記述の分析（67.5%）

国語は できない、苦手だ という見方が
国語は やり方次第で得点はのびる という見方に变化した

図2-1：質問2の生徒記述

他にも「テスト前の勉強だけでいい」⇒「予習復習をしっかりとやらなきゃ」、「他の教科と関連はない」⇒「どの教科にも必要なこと」などの記述があった。これらの記述から生徒にとって、今後国語学習をするうえで好ましく、学習動機が高まる方向に意識が向いてきていることがうかがえる。

・「変化がなかった」「あまり変化がなかった」と回答した記述分析（32.5%）

国語は どの教科も勉強は大切何れも という見方を持っていたが、特に変化しなかった。

図2-2：質問2の生徒記述

他に「理解をして、自分の意見をしっかりと持ち学習することが大切」という記述があった。これらの回答群からは、もともと望ましい国語観を持っていたことがうかがえる。今回のオリエンテーションではその確認や補強がで

きたのではないかと推測される。

一方で、次のような回答も見られた。

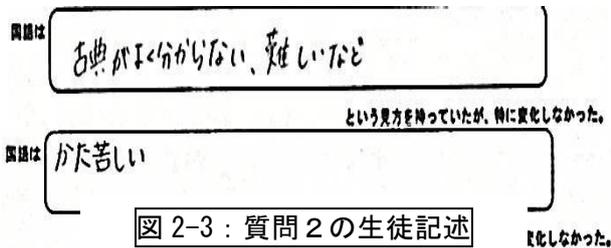


図 2-3：質問 2 の生徒記述

これらの回答からはまだ国語に対する抵抗感が残っていることがわかる。前述のとおりキャッチコピーの説明が不足していたことが要因のひとつと考えられる。

質問 3. オリエンテーションの説明はどうだったか？

・「わかりやすかった」と回答した記述分析 (92.5%)

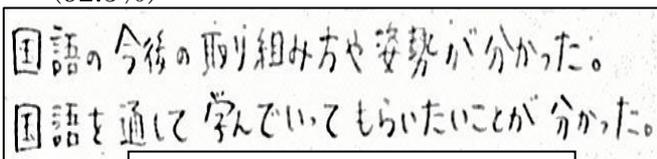


図 3-1：質問 3 の生徒記述

他にも「話を聞くだけではなく、プリントを見て説明したり簡単なテストをしてどこが重要か明確にしているところがよかった」などの記述があった。いずれもミニテストに関する言及で、具体的な失敗経験をすることで生印象に残ったことがうかがえる。

・「わかりにくかった」と回答した記述分析 (7.5%)

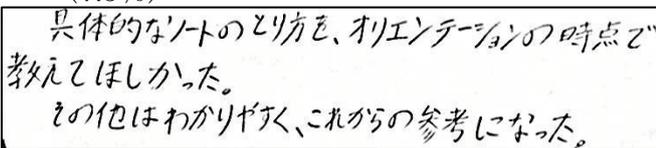


図 3-2：質問 3 の生徒記述

図 3-2 はあまり踏み込んだ説明ができなかったノート作成に関する回答である。学習意欲が高い生徒にとっては説明がやや不足していたようである。しかし、今回の教科オリエンテーションについて、実施中の生徒の様子

や、事後アンケートの結果を踏まえると、「国語学習の必要性の実感」「国語学習法の理解」「科目横断的な視点の養成」という部分において、学習の成果が表れており、「学習上の注意事項を確認させ、高校での学習への馴致を図る」という目的を達成する手段として効果があったと思われる。

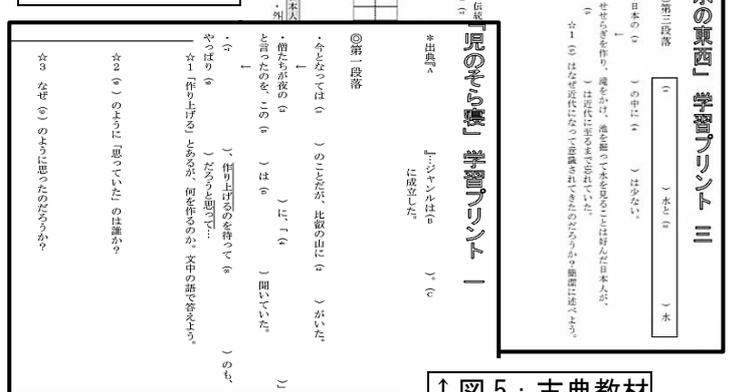
5. 教材プリントの工夫

(1) 現代文について

現代文については昨年度の調査から学習の仕方がわからない生徒が最も多く、家庭学習の時間が英数や古典と比較して少ないことが明らかになっている。そこで、教科書の要点を穴埋めにし、いくつかの問題提起を盛り込んで、生徒が予習として取り組める学習プリントを單元ごとに作成した。国語の学習上必要な観点を提示し、自立学習のプロセスを保障して学習方法を身につけさせることを意図した。このプリントを通して、未熟でもよいので生徒なりに教材を読解して授業に臨むことでより深い理解につながり、結果として豊かな学びに結びつくと考えた。

また、現代文においては、中学校と比較すると板書量が大幅に増えるため、授業時のノートの代わりとして使えるようにした。(図 4)

図 4：評論教材→



↑ 図 5：古典教材

(2) 古典について

◎古典は生徒が予習として本文をノートに写し、現代語訳し、授業で確認するというサイクルが高校の古典学習の基本スタイルになっ

ている。しかし、中学校の教科書にはすべての古典教材に現代語訳もしくは詳細な脚注が付されており、高校でいきなり本文全文を現代語訳することは生徒にとっては少なからぬ負担になると感じた。そこで、単元の大まかな流れがわかるようなガイドラインとなる部分はあらかじめ載せ、古文で省略されがちな主体客体や頻出単語の意味などを書き込める学習プリントを単元ごとに作成した。特に4月中に実施した単元については、入門期の生徒にとって現代語訳するのが難しい接続助詞や助動詞を事前にプリントに載せておき、現代文と同様に本文の問題提起を盛り込んだ学習プリントとした。(図5)

6. 授業の工夫

(1) 現代文について

①読み方の指導

評論文、小説単元導入前に教科書の本文のどのような記述に注意して読んでいけばよいのか、要点の読み取るための教科書本文へのチェックやラインの引き方(学習法)の指導を徹底して行った。また、本文の内容を読み取れたことに満足せず、そこから一般性を見出して、本文の内容を自分にひきつけて理解することが重要であることも説論した。

②学習の仕方の指導

現代文では授業前に単元の文章に対して疑問点「？」をためておくことが大切で、授業はその「？」を「！」に変える場であることを説明した。そのうえで「学習プリント」を配布し、予習をして「生わかり」の状態にするとともに「？」をためておくよう指示した。

③板書の簡素化

前述のとおり中学校と高校の授業の大きな違いのひとつが板書量である。とはいえ、中学校のように板書を授業1時間に1面以内に収めるのは現実的に難しいため、前述の学習プリントをノートの代わりにし、学習プリントに教師の板書を補足的に書き込むことで、

従来の授業のように板書にかかる時間を短縮し、教師の説明を聞く時間を十分に確保することで、予習で生徒がためてきた疑問点を解決できるようにした。

④生徒相互の学びあい・交流学习の導入(中学の授業を参考に)

中学校の授業との接続を保障し、学習上の有効性が高いことから、交流学习を取り入れた。学習プリントには予習として生徒に取り組ませる問題提起(☆印のついた問題)があるので、生徒自身がその問題をどのようにとらえてきたのか相互に意見交換をする時間を設け、周囲の意見と自分の意見の相違点や論点の着眼点などについて確認させた。

(2) 古典について

①学習の方法・意義の強調

- 1) 世の中には流行と不易があり、古典はその両方を感じることができる。とくに脈々と日本人に受け継がれる不易の部分を古典の授業で感じてほしいということ。
- 2) 英語もそうだが、和訳や現代語訳されたものは少なからず訳者の感性や恣意が反映される。原典で読むことで作者のメッセージをダイレクトに受け入れられるようになること。
- 3) 古典の学習は語学学習であり、声に出して読んだり、手を使って書いたり、五感を総動員させた学習が大切であること。
- 4) 今の単元は中学校のどの内容と関連しているのかということ。

②生徒相互の学びあい・交流学习の促進(中学の授業を参考に)

- 1) 現代文と同様に学習プリントには予習内容に関して意見交換をする時間を設け、周囲の意見と自分の意見の相違点や論点の着眼点などについて確認させた。
- 2) 本文の相互音読(速読)や、単元終盤期には一文ごとに相互現代語訳をさせ、疑問点や課題点を共有させた。

(3) リフレクションシートの導入(図6)

調査項目：自作およびベネッセコーポレーション「スタディーサポート 学習状況リサーチ」を参考にした。

(2) 質問項目と調査結果 (一部抜粋)

(質問項目は複数回答を可とした)

- i 現代文の自宅学習では何をしているか？
- ii 現代文の学習について、学習する上で最も悩んでいることは何か？
- iii 古典について持つよいイメージは何か？
- iv 高校の国語の授業内容は、中学校の学習内容とスムーズにつながっていると思うか？

(3) 考察

i について、報告者が担当する生徒の 83% が予習をしていることがわかった。現代文の学習法の指導および、学習プリントの作成によってすべきことが明確になり、学習が行われるようになったことがわかる。

ii から「学習の方法がわからない」が 29% (前年度 40%)、「真面目に取り組んでいるのに成績が伸びない」が 17% (前年度 6%) であった。前者については学習方法の指導が奏功していることがわかる。後者から、取り組みに対する成績伸長の実感がない生徒が前年よりも増えていることがわかる。現代文は知識よりも読解力や表現力が主となり、これらの力は徐々に身についていくもので、学習の即効性に乏しいものである。焦らずに継続していくことの重要性を説いていく必要がある。

iii からは、「興味がわく」「昔の人の考え方や人生観がわかる」「物事の考え方や視野が広がる」の項目がいずれも前年度よりも 10% ほど多く、本研究の副題である「豊かな学び」に通じる項目で伸長が見られる。また、自由記述で書かせた現代文・古典を学ぶ意味を尋ねる質問に「人生観を豊かにするため」「昔の人の感性にふれて心を豊かにするため」と自分で学ぶ意味を見出していることがうかがえる記述も見られた。これらの結果は単に教材の解釈にとどまらず、一般性を持たせる指導をしてきたことが奏功していると思われる。

iv について「そう思う」が 32% であった。「どちらかといえばそう思う」も合わせると 76% で、接続を意識した授業は生徒にも伝わっていることがわかる。中学校の単元とのつながり、中学校での学習法との比較など、折にふれて中学校との関連を説明したことで、生徒も高校の国語が中学校の学習とつながっているという実感をもてたのではないかと思われる。こうした実感は、高校入学間もない生徒にとって学習上の不安を軽減する要素になると思われる。

9. まとめ

定性的・定量的な分析結果より、高校入学期より夏休み前までに、教師が生徒に対して「中学校の既習事項とのつながり」「学習の内容」「学習の方法」「学習の意味」を教示し、教材プリント等を併用した指導をしていくことが、中学校と高校の学習ギャップを緩和するうえで効果があるということが明らかになった。また、こうした指導が結果的に生徒の国語学習への興味や関心を喚起することにつながり、個別の単元にとどまらずに、広く物事を考えていこうとする意欲の形成に資することになったと考えられる。

一方、前述の調査で「読解に不安がある」「真面目に取り組んでいるのに成績が伸びない」と回答している生徒が少なからずいるので、今後はこうした生徒の学習状況に応じた質的な助言をしていきたいと考えている。

10. 参考文献

- 市川伸一 (2008) 『教えて考えさせる授業』を創る—基礎基本の定着・深化・活用を促す『習得型』授業設計 (教育の羅針盤) 図書文化
- 市川伸一 (2011) 「活用を通じた動機づけと学習法の指導が沖高のギャップを埋める鍵」『VIEW21 2011 年 9 月号』PP13~PP15 ベネッセコーポレーション
- 野矢茂樹 (2001) 「論理トレーニング 101 題」産業図書
- 「ベネッセサポート 学習状況リサーチ」